



Title	日本人と異文化 : インドネシアにおける戦前の日本人社会をみる
Author(s)	ラフマツト, ナンダン
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1989, 23, p. 15-24
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/56544">https://hdl.handle.net/11094/56544</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 日本人と異文化

— インドネシアにおける戦前の日本人社会をみる —

ナンダン・ラフマツト

## はじめに

単一民族と考えられた日本人にとっては海外へ出かけるということは異文化に接することであり、その時どういう態度をとるかは大変興味深いことである。

開国以後、特に明治末期に入ってから個人的に商業を営むためにインドネシアへ渡る日本人の数が次第に増加した。蘭領東印度（以下蘭印）の領事館が1917（大正6）年6月末に行った調査によると日本人の総人口は3,635人であった。この日本人人口は昭和期に入ってから太平洋戦争前までさらに増えつづけてトコ・ジュバン（日本人の店）が最盛期を迎えた1938（昭和13）～39（同14）年ごろにはその数が6,000人にもものぼった。

インドネシアで一生を終えるつもり日本人定住者の商いがある程度安定した大正末期から昭和元年ごろになると、学齢に達する子供が多くなった。そこで、子供を教育する施設、すなわち学校が必要になって、日本人小学校の設立運営、教科書、教育方針等の問題が、日本人社会の間に表面化された。蘭印における日本人の教育者の意識、子供の教育方針、教育方法、子供自身の意識のありかたなどから日本人の異文化に対する認識の一端を知ることができよう。

## 第一節 インドネシアにおける日本人の歴史 渡南のきっかけ、渡南者の生活及び「一等国民」意識

明治末期から第一次世界大戦まで、かなり多くの日本人が南洋に渡った。この時期に南洋に多量に流入したのが南洋で事業をおこそうとする若者であった。このような日本人の若者が大量に流れ込んだ一つの背景には「南洋ブーム」があった。南洋ブームは1910年代からはじまり第一次大戦ごろに非常に高まった。そして1930年代前半ごろまで、多くの青年を南洋に押し出す上で大きな役割を担ったのである。

南洋ブームのはじまったきっかけが何だったかは、はっきり知られていないようだ。1880年ごろから南洋を視察して印象記を著わす人はいたが、人々の南洋への関心が高まったのは、1910年南洋を巡察した竹越與三郎の『南国記』が出てからであるとされている。南洋ブームがはじまる直前の1909年、バタビア（現ジャカルタ市）に領事館が開かれて、蘭印での海外投資が可能になったこと、種々の手続きが簡単になったことによって、次第にトコ・ジュパンや大手会社の出張所が蘭印にも増えてくるようになった。

日本人は商業のためにインドネシアへ渡ったのだが、草わげ的な時期の行商は相当忍耐のいる仕事だった。1920年から1930年ごろまでがトコ・ジュパンの最盛期となった。ジャカルタ、スラバヤ、スマラン、バンドンといった大中都市に日本人街が形成されるほど日本人の商業活動は活発であった。『爪哇月報』の昭和4年4月1日は次のようにのべている。

「蘭印に居る日本人は例外なく商業又は企業に従事しているもので単純労働についているものは一人もなかった。」

日本人の中には、インドネシア民衆社会に深く入り込んでインドネシア人と結婚し、インドネシアの民衆として生活したものもあったが、ほとん

どは商店主としてオランダ人、中国人、インドネシア人など植民地社会の各層を相手とした店をつくり商売を営んでいた。インドネシア人層を相手に商売したものの中には、Kyai（キアイ＝イスラム教について深い知識をもっている人）、Haji（ハジ＝メッカ巡礼経験者）、村長などの人々と家族的な付き合いをするものもいた。しかし、かれらの交際範囲はほとんどそれらの有力者に限られていたようである。

トコ・ジュバンは安価で正札主義をとっていてその正直さから子供でも買物ができると親しまれたという。取り扱った品物のほとんどは日本製で、初期のころはヨーロッパ製に質の点で劣っていたが、技術の進歩と共に質の良い雑貨、繊維などが入ってくるようになって、安かったため人気をあつめ、次第に日本人以外の店でも日本商品を扱うようになった。

日露戦争後、国内はもとより国外にいる日本人の間にも「一等国民の意識」が広がった。戦前のこの一等国民意識は日清・日露戦争に勝ちつづけ、それまでに目標とされてきた欧米先進諸国に追いついたことから生まれた意識である。

トコ・ジュバンをはじめとする日本人社会の常識となっていたのは、南洋においては、日本人は一等国民として生活程度も日本でよりずっと高くなければいけないという考えだった。したがってインドネシア人や中国人の友人をもったり彼らと家族ぐるみで付き合い合うことは少なかった。また、日本人は一等国民として蘭印で白人と法律的に同等の地位を与えられたことを自負し、インドネシア人や中国人に対する優越意識をもって行動していた。それが彼らの商業活動の励みとなっていた。

1930年代初頭の邦人は一等国民意識に支えられ祖国への帰属意識をもちつつも、現実の経済基盤という観点からは「落地生根」の心意気をもって生活していた。その場合の「生根」の方向はインドネシアの民衆社会（「複合社会」の底辺に置かれた「原住民」社会）への自己同化ではなく、

オランダ植民地支配を前提とした商権の確立ということになった。

蘭印の日本人は、一等国民意識を張合いとして商業を営んでいたが、日本国内における日本人よりもはるかに強い意識をもっていた。その背景には「立派な日本人」になりたいという根強い願望があったものと思われる。

当時一般に南方に渡った人間に対する日本の目は冷たいものであった。日本からあぶれた者、三流四流の者が新天地を求めて出かけてきたのが南洋だったとされていたからである。日本本国において一流と認めてもらえない不満は本国でよりも立派に暮らそうという意識に反映され、さらには日本人と中国人とを比較し、競争意識をもち、これに優越感をもつことでいやされていたはずである。

商業上ライバルである中国人とは服装にも差をつけるほど一流願望をもっていた日本人は、日本本国に一流の人間であると認めてもらいたい意識を潜在させていた。自分の商売を継ぐべき子供たちにも立派な日本人であることを強く望んでいたのである。日本人の意識は次世代へうけつがれるべきものであったから、日本人の教育機関の必要性が生じたのは当然のことである。

## 第二節 邦人子弟の教育

邦人商人が各地に定着し、家族をもつようになった大正末期から昭和2〜3年ごろにかけては学齢に達する子供の数が増えてきた。そこで在留邦人は子供たちに日本人としての教育を施し、立派な日本人に育つことを願っていたのである。さらに、日本人教育を要望していた理由として、蘭印では日本人は穏和で正直、勤勉な商業移民であるとの評判が確立していたから、はっきり日本人であることがわかったほうが蘭印での就職に有利であるという背景があったことも無視できない要素である。

学校の必要性という点について少し角度をかえてみてみよう。蘭印に学

校設立等のため赴任してきた教育者が、在留邦人の子弟に関して気づいた点は「子供らしさ」に欠けているということであった。それは子供たちが子供同志で遊ぶ環境を与えられず、家庭内で閉鎖的な環境に育ってきたことに原因すると考えられ、子供の世界を与えるためにも学校教育が必要だといわれた。

邦人の定住商人がどのような定着性を示していたかについて、日本人の生活を『爪哇日報』、『東印度日報』で追った結果、昭和4～5年ごろと昭和14年ごろを中心に教育をめぐる記事が比較的多いことがわかった。子供の教育の方針、方法、子供自身の意識のありかたなどを調べてみることから日本人の蘭印における土着性がわかるであろう。

邦人の土着性をみるために、邦人の日常生活、家庭生活について述べる必要があると思う。「当時はどんな家庭でも Babu (女性の使用人), Jongos (男性の使用人) を三人以上おいて奥さんは主人の送り迎えをするくらいで料理、洗濯、掃除、子守まで彼らがやってくれるため奥さん連中は身の装飾にいっしょけんめい」であったという。

スラバヤ日本人小学校設立当初は、子供は一人一人バブがついて車で送り迎えをつけていた。そういう子供たちに触れるうちに「教育といってもなかなか日本本土と異って苦しい」と述べた山下校長は、邦人の子供たちの性格というか子供たちの置かれている状況から諸要因に悩まされ、現地の使用人の存在が邦人の特殊な欠点をつくった直接原因であると分析している。スマラン校長堀内吉内は昭和5年1月1日の『爪哇日報』に子供の欠点として次のような点をあげている。

1. 依頼心が強い。
2. 後始末がない。
3. 勤勉、力行、節約等に欠けている。
4. 忍耐持久、奮闘、努力をみることが少ない。

5. 清潔, 整頓, 礼儀, 高尚な美点と卑俗, 不仕駄羅, 不清潔, 不整頓等の内面が極めて顕著に矛盾して発達している。

この堀内はとりわけ現地の使用人の害を強調した人物である。

スラバヤ校では子供の本性をのぼすために唱動作付の発表遊戯, 体操遊戯, 競技, 屋外での運動などを日課としてとり入れた。

昭和5年ごろ山下は地方児童を収容する小さな寄宿舎を運営していたが, その児童たちの教育にも現地の人達に対する意識があらわれている。寄宿舎では先に入った子供が後から来るものを感化するが, それが自ずから子供たちのインドネシア人ばなれを促進していた。寄宿舎は物理的にも精神的にも日本人を意識させて現地の人達との間を隔絶させるのに充分なはたらきをもっていた。

また, 日本本土の教育と違う点は皇国教育のことであった。日本を遠くはなれた蘭印で日本人や日本の偉大さを強調するほど子供たちの指導が容易であった。スラバヤ校では徳育にこれを利用した。どんな低学年の子供でも自分が日本人であるという自覚をもっていた。その自覚は日本や日本人の偉大さと結びついていたので道徳的な反省を子供に促したいときは天皇陛下や日本の偉人, 日本の歴史, 日本の風土などを例にとって子供の直感に訴える指導をした。こうして日本人の意識は教育の場で, より具体的イメージにかえられることになる。

実際に徳育で教えられた日本人像とは次のような事項である。「日本人は偉い, 日本人は情深い, 日本人は人を助ける, 日本人は體は小っちゃいが強い, 日本人は勉強もよくできる, 日本は國は小っちゃいけれども天皇陛下と云ふ方がゐらっしゃる, 日本は神様が守ってゐて下さる。日本の國旗は日の丸で一番勇しい, 日本の軍艦は強い, 日本はきれいな國だ, 日本には日本魂がある。」

### 第三節 異文化と日本人

異質な文化に出会ったものは、必ず何らかの文化摩擦を受けるという考えをとりたい。蘭印を考えるときは、南洋文化圏というより南洋文化を素地とした植民地文化と考えた方がより実情に合っているように思う。

蘭印に来た当初は南洋の気候や文化遺産に関心をもった者が、時が経つにつれて関心がなくなり、現地の使用人や得意客でもある現地の人達の欠点ばかりが目につき、さらに日本人の子供の欠点をこれに起因するものとして、現地の人達の属性のように考える傾向が邦人にみられたことは前にも述べたとおりである。

蘭印時代の在留邦人商人の場合は、昭和期の定着期にはいわゆる「出稼根性」も消え、自分から土着しようという意志をもつ人々であった。しかし、土着しようという社会が蘭印の植民地社会であったため、その精神的土着をはばむさまざまな要因からなる壁が存在していたと考えられる。小島は「在留邦人は生活の必要上、現地文化に溶け込んで商売をやってゆかねばならず、摩擦はあってはならないものであった。」といっているが、多くの場合、「現地文化」に溶け込むということがたてまえなら、摩擦があつてはならないということもたてまえであつて、邦人たちは理解できない部分のある「現地人」や「現地文化」のまえに批判や不満を解消できずにいたはずである。

第一の壁はことばであろう。マレー語がインドネシア統一に力を発揮するのは1940年代に入ってからである。したがって、本来ジャワ語やスンダ語を話しているジャワの住民や邦人家庭の教育のない使用人などの話すマレー語は、生活に必要なレベルまでであつて心情を通じ合うほど流暢ではなかった。これは同時に邦人側の一般的語学レベルにもいえることである。そこに一種のディスコミュニケーションが生じ、邦人の側からみると理解



できない不可解な感じがつきまわっていた。その結果、現地の人達の背景にある南洋文化や南洋の生活様式、南洋気候にまで人間を墮落させるものという敵意に似た感情を抱くに至っている。

第二の壁は蘭印植民地社会の支配・被支配の関係であった。オランダ人は支配層として白人絶対優位を守っており、統治者は土着とは無関係の存在であった。一方、被支配層であるインドネシア人は抑圧された存在であった。

第三の壁となったのは邦人商人の客層が店によってまちまちだったことである。インドネシア人相手の雑貨商、日本人相手の卸商、欧人とインドネシア上層部相手の小売商など業種や商人によって客層が違ったということは、邦人の側により日本人である自分を意識させたのではないか。

上述のこと以外に当時、邦人社会では現地に同化することは退化であるとのことばがどうどうと通用していたほどである。現地の人との結婚は日本人社会からの脱落を意味した。小口という人物が土地の有力者の娘を妻にしたことも、地方の小都市であったから日本人社会も小さかったことを考慮しても、日本から妻をよびよせる他の人に比べればやはり周囲の多少違う目を覚悟せねばならなかったであろう。邦人社会がインドネシア人を「原住民」、「土人」と呼ぶ限り「半分溶け込んだ人間」は苦痛を感じざるを得ない。

### おわりに

土着を単に「土地に着く」という点からみれば、蘭印の日本人は十分に土地や築きあげた商売への愛着が深かったといえる。しかし、土着の対象となるはずのインドネシア民族は、植民地という支配・被支配の確固とした体制の底辺を成す人々であって、その数は絶対多数でありながら、その中に溶け込むという形の土着は日本人社会を構成する商人には存在し得な

かった。日本人商人は中国、アラブ、インドの商人と同様にその支配・被支配の中間層を形成し、欧州人とインドネシア人双方から利益を得ていたが、日本人は上下のどちらの層にも自ずから同化させようという精神的積極性をもっていなかった。

地方の小さな町などでは客層がインドネシア人に限られたし、田舎でインドネシア人を妻にした者もあった。そういう店の主人はいわば半分「土着」した存在だったが、現地の人との結婚をタブー視していた邦人社会から脱落しないためには子弟の教育も含めてよりいっそう立派な日本人として認められるよう努力する傾向があった。そして邦人社会が大きくなればなるほど日本人らしく生活しようという内部の力学が強く働いていたのである。

教育者自身、蘭印の邦人子弟にみられる欠点は南洋の気候、風土、現地の人達の生活態度、使用人への過度の依存、遊び場や遊び相手の問題から子供同志の世界がないなどによるものと考えたから、自身の文化ショックも反映されて日本教育をおしすすめることになったのである。つまり、日本人社会と教育者自身の双方から日本文化へ向う力が働いていた。

教育目標が元来、蘭印で活躍する有能な第二世を育成することだったにもかかわらず、教育からインドネシア文化と日本文化の融和を象徴するようなものは何一つ誕生しなかった。また、子供たちが教えられた日本人や日本文化の概念は多分にステレオタイプ的なものであったろう。そうして蘭印の日本人教育は日本本土で育つものは一流であって南洋という三流四流の環境で育つものは努力しなければ立派な日本人にはなれないという意識を子供たちにもたせたのではなかろうかと考える。親たちは三流、四流という考え方を打ちやぶり、本土の人間にも価値を認めさせようと努力したが、子弟教育を通じて、今度は蘭印で教育していく限り第二世は一流の人間にはなれないというジレンマを背負うことになったといえる。

最後に日本人の異文化理解の弱点について述べてみたい。

日本人は東アジアの国々や東南アジアの国々と文化において共通点があることを認識している。だが、なかなか深い理解を結びあえない実情をみると、日本文化は他文化との理解の基盤となる「共通項」がないように思う。

日本人はあまり宗教を重視しない傾向があるがアジアやアラブ、アフリカといった国々は一つの宗教を通じて深いところで信頼関係をもつことが容易だ。たとえば、インドネシア人はイスラム圏の人々とは心情的に相互に理解し合うことができる。日本文化は目にみえる部分では他の国と類似点があるが、その文化を支える人間の心情では異質なところがある。共通項をもてないまでも、心情の部分で認識していないと、最初に親しみを感じたことがらが、あるとき逆に遠ざけたいことがらになったりするのだということを強調してしめくりとしたい。

#### 主要参考文献

- (1) 『爪哇日報』昭和4年～5年。
- (2) 『東印度日報』昭和12年～16年。
- (3) 後藤乾一『昭和期日本とインドネシア』勁草書房, 1986年。
- (4) 小島 勝「南洋における日本人学校の動態」『東南アジア研究』18巻3号, 1980年12月。
- (5) ジャガタラ友の会編『ジャガタラ閑話 — 蘭印時代邦人の足跡』昭和5年。
- (6) 矢野 暢『「南進」の系譜』中央公論社, 昭和50年。
- (7) 外務省通商局『蘭領東印度事情』大正13年。
- (8) 竹越與三郎『南国記』二西社, 明治43年。
- (9) 大林太郎編『文化摩擦の一般理論』敝南堂書店, 昭和57年。
- (10) 青木 保『異文化遊泳』新曜社, 昭和60年。

(大学院前期課程修了・パジャジャラン大学講師)